

五体不満足を読んで

グレイ

まや

この本を初めて手にした時、私は表紙の写真を見てもびっくりしてしまった。そこには、手も足もない男の人が写っていたからだ。その男の人は、ニコニコと笑顔でも幸せそうに笑っている事にもおどろいてしまった。その人の名は乙武洋匡さんという。お母さんののお腹にいた時、先天性四肢切断という障害で両手足がないまま生まれて来た人だ。

カンタベリト日本語補習校

この本を讀む前は、乙武さんが毎日苦しんでいて、悲しい本なのだろうと思っていた。

乙武さんの両親だつて大変な思いをしているのだろうと思つていた。どうやって着がえ

ているのだろう。どうやって食事をしているのだろう。物をつかんだり、移動するのはどうして

いるのだろう。しかし、本を讀んでみると、乙武さんは出来る事がたくさんあつて、全く

悲しい話ではないことかわかった。

例えば、食事をする時には、フォークやス

プーソをほつぺたと短い腕の間にはさみ食べ
 ることが出来たし、同じようにしてえんぴつ
 をはさんで字を書く事も出来た。さらにおど
 ろいたのは、ふだんはL字形になつていた体
 のまま短い足を交互に動かし、自分で歩く事も
 出来ていた。私も乙武さんのまねをして、手
 と足をまげて、わざと短くしてみた。何もつ
 かめない。本もけしごおも小さなおもちゃも、
 何もつかめない。次に私は乙武さんが歩くよ
 うにおしりをひきずって歩いてみた。すぐに

カンタベリト日本語補習校

おしりが痛くなつて、ちつとも前に進めない。
 これだけで私は乙武さんという人がすごい人
 なんだという事がわかった。

一番感動した場面は、小学四年生の時の登
 山の場面だ。担任の高木先生は、

「乙武、えんそくの日休むか？山登るのたい
 へんだぞ。」

と言った時、クラスのみんなは、

「だめだよ。オトちゃんだけ休むのはずるい

よ。」

と言ったのだ。クラスのみんながまるで、
 手も足もあるみんなと同じ人間のように接し
 てくれて、いるのがわかって、私は感動した。
 そして、みんなが車のすをおしたり引張たり
 しなから山に登りきった時、本当にすごいと
 思った。何より山に登らせる事を決めた高木
 先生と乙武さんの両親は、とても勇気のある人
 達だと思ふ。普通なら、障害のある子供は、
 危ないからさせない事がたくさんあるのに、
 高木先生は、乙武さんを信じて、何でもやら

カンタベリト日本語補習校

せた。だから、縄飛びや鉄棒や水泳まで出来る
 ようになつたのだと思ふ。乙武さんが強くて、
 心のバリアフリーな人に育つたのは、乙武さ
 んを信じて、やりたいことを止めなかつた両
 親や高木先生のおかげだと思ふ。

以前私のクラスには、脳に障害のある友達
 がいいた。彼には、一人で出来ない事がたくさ
 んあり、まわりのサポートが必要な事もあつ
 たけれど、いつも自分で何でもかんばつていた。
 私はそんな友人を見て、彼もかんばつている

んだから、私ももつと新しい事に挑戦しよう
 といつも思っていたから、乙武さんのクラス
 メイトも同じ気持ちだったと思う。
 ときどき、町で体の不自由な人を見かける
 ことがある。困っているような時、私はどの
 ように声をかけたらいいか、どのように助け
 ればいいかわからずに、結局何も出来ない。
 「私は何で助けなかつたのだろう。」
 と心の中で自分をおこつてしまふ。乙武さ
 んは、障害のある人にもつと話しかけて、質
 問してほしいと言っている。これを読んで、
 次に困っている人を見かけたら助けてあげら
 れると思った。

カンタベリト日本語補習校

この本を読む前、私は、障害者はかわいそ
 うだと思っていた。しかし、この本を讀んで
 その考えが少し変わった。私達にだって出来
 ない事はたくさんあるし、自分の体が他の人
 と違うのはあたり前だと気がついたからだ。
 かわいそうなのはあつたのではなく、人間はみんな同じ
 じゃんやないのかわい。

四年生の時、私はヘレソケラーの本を讀んだ。そこには、

「障害は不便である。しかし、不幸ではない」と書かれていた。乙武さんもそう思っていると思う。なぜなら乙武さんは、

「障害をもっているけれども、ぼくは毎日楽しい。」と言っているから。

私も乙武さんのように勇気を持ち、最後までであきらめなない人間になりたい。そして、毎日楽しいと感じながら生きたい。それは、な

カンタベリト日本語補習校

い物ではなく、今ある物に感謝しながら生きることだと思ふ。だから今日から始めたい。私に幸せな生き方を教えてくれた乙武さん、どうもありがとう。